

# 歴史文化館ニュース 創刊号

2009. 10. 20

創刊号発行にあたって 歴史文化館運営委員長 梶山美恵子

この「ニュース」は、「歴史文化館」と学園の人々を繋ぐ1つのツールとして発行するものです。出来るだけ「歴史文化館」を身近に感じて頂いたり、新しい“発見”が出来るようなものにしていきたいと考えています。

さてここで、「歴史文化館」の立ち上げに関わってきた者として、その経緯について少し触れておきます。まず立ち上げの前提として、大学図書館の4階にもともと「学園資料室」が一室あって、そこを「100周年」で収集された資料も展示する場にしたいという声が上がっていたことが背景にあります。その他に半ば偶然とも言うべき次の2つの事が、立ち上げを進めるきっかけになりました。

その1つは、創設者正式氏・今子氏の遺品が沢山“発見”されたことでした。正式氏・今子氏が相次いで亡くなった時、一番身近でお世話をしていた遺族の一人（創設者の長男正英の妻で、元家政学部教授の藤子）が、とりあえずというつもりだったのでしょか、身の回りの物全てを未整理のまま数個の収納カンに入れ、それ以降ずっと開かずの間にそのままの状態で置かれていたものが、藤子没後に、“発見された”のです。発見者は筆者でしたから、“発見した”というのが正確なところですが、45年の時を経て、思いがけず出てきた沢山の遺品を前にして、戸惑ってしまいました。しかし学園に長く関わってきた者として、遺品を何とか生かしていかなければと考え、とりあえず学園に運び込ませてもらうことにしました。

もう1つは、ちょうど学園に大口の寄付がありそれが「歴史文化館」立ち上げのために使えることになったことです。

こうして2つの事柄を背景に設立準備に取り掛かることになりました。「設立準備委員会」ではまずコンセプト作りに先立って、日本女子大、玉川大、東京家政大、立命大などの博物館・記念館を訪問し参考にしました。コンセプト設定後は全体の構成と設計、部屋の改修、そして展示資料の発掘と整理、展示資料の作成、展示資料案内一覧の作成、実際の展示



作業・・・と様々な仕事が続きました。資料を実際に展示するまでの細かい作業は広範で膨大なものがあって、予想を遥かに超えた労力と時間を費やすことになりました。準備中、学園に残されているはずと考えていた古い資料が意外な程少ない事が分かり、行き詰まったこともありましたが、遺品が相当役に立ったという結果になったのは幸いでした。

学園の多くの方々への協力やアドバイスをいただきながらの準備でしたが、設立そのものに関わるのはだれも皆始めてのことでした。時には休日を返上して準備にあたり、手探りしながら知恵を出し合って何とか一応の形を整えることが出来たのは、関係者全員の努力と熱意によるものです。ようやくオープンにこぎつけた時は、一同ほっとしたものでした。「歴史文化館」はこのような経緯を経てオープンしました。

今回のオープンはいくまでスタートに過ぎません。オープン以来4ヶ月、「運営委員会」「専門委員会」「ワーキンググループ」の会議を持つ中で、運営上の課題がいろいろと見えてきました。今それらについて順次取り組みを始めていますが、学園の関係の皆さんのご協力なくしては解決できない課題が多くあります。「歴史文化館」が、学園をより深く知る場として、また学園をより広くアピールする場として、その役割を果たしていくことが出来るよう、改めて皆さんのご協力をお願いする次第です。

歴史文化館を訪れて 加藤 元子（同窓生・旧教員）

梶山正式先生の生誕130周年記念事業として、歴史文化館の誕生に旧職員・卒業生の一人として、心よりお祝い申し上げます。

館内に入るとまず飛び込んできたのは正式先生のお優しく温かみのある寿像でした。学園創立以来の歴史的資料の展示室と、学園に関係する方々との交流を知る文化展示室に数多くの資料が展示されています。5階の金剛塔の内部には、正式・今子先生の居住の場が設営され梶山家の系図・ご家族の

写真・正式先生の書・今子先生の家計簿から献立表迄展示されていて思わず涙が溢れてまいりました。

特に印象に残ったのは正式先生が古希を迎えての和歌「何つくす事をもなさで七十路のさかを越えゆくわれはづかしも」の一首です。偉大な人格者であり乍ら謙虚なお心が痛い程伝ってまいりました。梶山に関わる人・卒業生は是非一度歴史文化館をみて創設者の遺徳を偲びましょう。最後に梶山美恵子先生を始め設営に関係された方々に感謝いたします。

## 【文化展示室トピックス】

### ＜森川如春庵じょしゅんあんと椋山女学園＞

歴史文化館開館記念企画展「椋山正式・今子趣味の世界」に於いて、「男爵益田翁孝貞三輪女頌徳之詠草」と題した掛け軸が展示されている。

この掛け軸の箱書きには森川如春庵の名前が記されており、展示品として事前に調査を行ったところ、大変貴重な掛け軸であることが判明した。

森川勘一郎（1887～1980、以降「如春庵」）は尾張一宮の大地主森川家の当主であり、近代を代表する茶人の鈍翁益田孝（どんのうますだたかし／1847～1938）や山溪富太郎（1868～1938）など、時の日本を代表する財界人であり文化人でもあった人々と交流を結び、近代の茶の湯の世界で頭角を現した。書画や、和歌、俳句、作陶に熱心であった。また、茶道具の収集家でもあり、特に本阿弥光悦作の黒楽茶碗「時雨」（重要文化財）の所蔵者としても知られた。

如春庵は昭和初期に一宮の本宅ではなく、覚王山の別邸で家族と暮らしており、3人の娘（故人）を椋山女学園に通わせていた（同窓会名簿で確認済）。この別邸から眺めた風景を山田秋衛（森川家と親交のあった名古屋の画家）が「覚王山十景図」として製作し、松林の間に椋山女学園の校舎が描かれている。

さて、この掛け軸自体は、別邸で暮らしていた時期に如春庵と親交の深かった鈍翁益田孝によって書かれ、如春庵が表装・箱書を行ったことから大変貴重な掛け軸である。

\*\*\*\*\*

## 【歴史展示室トピックス】

### ＜開校当時の制服＞



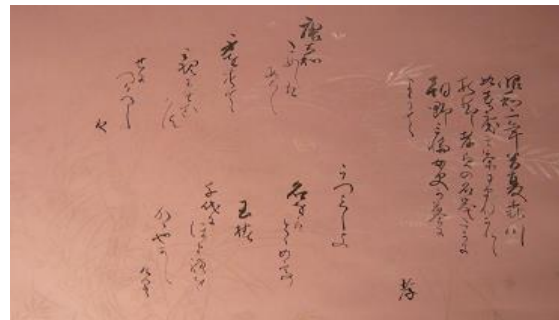
明治 38 年の開校当時の生徒たちは髪を日本髪か束髪にし、海老茶の行灯袴（あんどんばかま・股の間に仕切りのないスカートのような形の袴）に、足元は下駄でした。この海老茶というのは紫を帯びた暗い赤にやや茶色がかかった色で、当時、女学生の袴の色として流行していました。またその様子を平安

掛け軸中、「孝」は鈍翁益田孝（三井財閥の初総帥でもある）であり、「三輪」は朝野三輪（1722～1806）で、60年間も病床にあった夫に仕え、貞婦として知られた一宮出身の俳人である。この貞婦を讃えるという内容から当時の椋山女学園に贈られたと考えられる。

今回の調査によりこの掛け軸は薄い桃色の紙面に書かれ、一方で森川家には白色の紙面に書かれた同様の掛け軸が存在しており、紅白で対をなすことが判明した。

また、現在の森川家（一宮市）には、如春庵が編集した「夏蔭帖」という書物を椋山女学園に寄贈したことによる校長椋山正式の礼状（大正 15 年当時）が残されている。これは如春庵との親交が窺えるものであり、如春庵と椋山女学園は大変縁が深いことを示している。

（今回の調査は文化情報学部の飯塚恵理教授に全面的な協力をいただいた）



男爵益田翁孝貞三輪女頌徳之詠草

時代の才女・紫式部になぞらえて、女学生を「海老茶式部」と呼ぶ事もあったようです。現在では、皇室において内親王が 5 歳を迎える際に執り行われる「着袴の儀」にもこの海老茶が使われています。当時はまだ校章が制定されていなかったため、裾の黒い波形テープによって椋山の生徒とみなされました。その後、この波形は同色直線 2 本になったり、その間に白線を加えたりしながら時代と共に変わっていきました。

<開校当時の模型>



明治 38 年の名古屋裁縫女学校の開校当時の生徒による模型です。名古屋市富士塚町（現在の東区泉あたり）にある尾張藩の稲葉邸を借用し、開校しました。模型から察せられるようにその屋敷は間口が広く大きな門構えのある大屋敷で、教室と

して使用された桜の間と呼ばれる部屋のすぐ目の前には大きなしだれ桜の木がそびえ立っていました。写真パネルコーナーにはその桜の間の縁側で談笑する生徒の姿や、点茶を楽しむ生徒の姿が展示されています。開校当時およそ 90 名だった生徒は翌年にはおよそ 250 名まで達し、次々と増えていく生徒の数に教室不足が生じたことから屋敷の東側に分校を新築しました。分校ができた当時の地図「学校位置及附近之図」からも伺い知る事ができます。

また近くには武家屋敷のほか善光寺や高岳院などの寺院や、近隣にも多くの学校が設立され、名古屋で最初の文教地区が形成されていきました。

\*\*\*\*\*  
**新聞に掲載されました。**

「歴史文化館オープン」のニュースが、2009年8月9日（日）付の中日新聞（市民版／朝刊）に掲載されました。（新聞記事自体は割愛させていただきますが、以下要約した内容を紹介いたします。なお写真は新聞掲載のものとは違い、歴史文化館担当者の撮影した写真を掲載しています。）

学園創設者梶山正式の生誕130周年に当たり、大学図書館4階の資料室200平方メートルを改装し、学園創立100周年時の収集品や創設者の遺族からの遺品を2,000点ほど展示。

創設者の足跡や、学園でこれまで学んできた学生たちの活動について、学園の歴史が手に取るように分かることが紹介されています。

梶山正弘理事長は「歴史文化館を通じて学生、保護者、地域の方々に学園の歴史を知っていただきたい」と述べられています。

歴史文化館開館日

毎週水曜日 10:00～16:00、 毎週土曜日 10:00～13:30

入場無料。学外の方は予約が必要（梶山女学園総務課 052-781-1186）



\*\*\*\*\*  
**資料寄贈について**

梶山歴史文化館では学園に関する資料の寄贈をお願いしています。

在学時代の思い出の物品（教科書、ノート、印刷物、記念品、写真、作品など）資料を是非ご寄贈くださいますようお願いいたします。

資料の寄贈につきましては、下記までお問い合わせください。

総務部総務課 電話052-781-1186（内2722）

歴史文化館運営委員会報告 第1回委員会（平成21年7月10日）

役職	氏名	所属	役職	氏名	所属
委員長	梶山 美恵子	幼稚園長	委員	澤田 善次郎	図書館長
委員	野淵 龍雄	学長	委員	加藤 雪枝	梶山女学園同窓会長
委員	梶田 正巳	高等学校及び中学校長	委員	兵藤 平	梶山女学園幼小中高PTA並びに大学振興会連絡会長
委員	中村 太貴生	小学校長			
委員	高木 吉郎	事務局長			

1) 構成メンバーと役割

「歴史文化館」は全学園に関係する部署であることから、全学園に目配りがされるよう、それぞれの代表メンバーにより構成される。

委員会は原則として年2回開催し、当年度の業務報告と次年度の業務計画の審議及び承認を行う。

2) 歴史文化館の今後の課題と確認

- ①自校史を学ぶツールとして、利用の促進を図る。  
幼稚園から大学まで独自の利用方法を検討する。

②教職員、在学生、同窓生、父母、などの利用促進  
さまざまな会などでの利用促進

③大学図書館との連携と調整

④「文化展示室」利用の計画

当面の計画としては大学開学60周年の写真展を  
12月に開催

⑤その他

今年度実施できるものは全て実施し、次年度の計画については予算措置も含め、次回の委員会で検討を行う。

歴史文化館専門委員会報告 第1回（平成21年7月24日） 第2回（9月11日）

役職	氏名	所属	役職	氏名	所属
委員長	梶山 美恵子	幼稚園長	委員	八木 茂徳	現代マネジメント学部事務室長
委員	杉藤 重信	人間関係学部教授	委員	村瀬 輝恭	総務課主任
委員	森本 伊知郎	文化情報学部教授			

1) 報告事項

第1回歴史文化館運営委員会の報告

2) 検討事項

- ①歴史文化館のホームページを設置して「自校史教育」と「情報発信」を推進する。
- ②資料収集のあり方を検討する。

③将来「博物館相当施設」を目指す。

活動状況、保存、展示など近隣の大学施設の現状調査

④収集・保存・展示に関する改善点の検討

⑤「歴史文化館」ニュース発行→ホームページに記載

⑥学芸員課程との連携・学芸員実習との日程調整

⑦専門委員会の下にワーキンググループを設置

歴史文化館ワーキンググループ報告 第1回（平成21年8月25日）、第2回（9月2日）、第3回（9月9日）

役職	氏名	所属	役職	氏名	所属
グループ長	村瀬 輝恭	専門委員	メンバー	河路 峰雄	総務課（歴史文化館担当）
メンバー	梶山 美恵子	運営・専門委員長	メンバー	大浦 詔子	歴史文化館受付係
メンバー	原田 明人	総務課長			

1) 役割

運営委員会、専門委員会で発案された案件を具体的に考え、課題の遂行及び必要な事務作業等を行う。

2) 歴史文化館の位置づけ

- ①自校史教育（ガイドライン作成）
- ②学園のPR（様々な行事で見学コースとする）

3) 資料の収集、展示、保存

中性紙と検索システムによる保存の確立

4) 文化展示室企画案の策定

5) ニュースの編集発行、ホームページの設置

6) 新規予算額の策定

\*\*\*\*\*  
編集後記

歴史文化館が開館して4ヶ月を過ぎました。学園の関係者、在学生、卒業生等、大勢の皆様にご来館いただいております。今回ニュース創刊にあたり、試行錯誤で記事を構成いたしました。今後は皆様のご意見、ご感想を基に充実した内容を目指したいと思います。

歴史文化館ニュース 創刊号

発行日 2009（平成21）年10月20日

編集・発行 梶山歴史文化館

名古屋市千種区星が丘元町17番3号

TEL 052-781-1186（代）

編集担当者 梶山美恵子 村瀬 輝恭 大浦 詔子